

【中学生区分】

宮城県優秀賞

「障害のない遊び」

気仙沼市立松岩中学校

2年 西條 南音

私は遊ぶことが好きです。友達と遊ぶと、マイナスの感情がなくなり、心の中がプラスの感情で満たされるからです。

私がまだ小学生のとき、支援学校の生徒の皆さんと交流会を行ったことがありました。私はその日を心待ちにしていました。しかし彼らは、まるで私たちが見えていないかのように自分のしたいことばかりしていて、一緒に遊んではくれませんでした。私は少し悲しくなり、みんなと遊ばないなんてもったいないなという気もしました。障害のある人はみんなと遊ぶことを楽しいと感じないのでしょうか。私はそうではないと思います、遊ぶことが楽しいかどうかは障害の有無は関係ありません。障害があっても、きっと遊ぶことを楽しいと思えるはずです。

障害のある人も私達と同じようにみんなと自由に楽しく遊んでほしい。そのためには何が必要なのだろうと思いました。そこで私は「障害のある人と一緒に楽しく遊ぶためにはどんなことが必要だろう」ということを探究していくことにしました。

まず私は「障害のある人と私たちの間に差が生まれえないような遊びが必要なのではないか」という仮説をたてました。

次にその仮説をもとに、障害のある人でも楽しめる遊びを考え、それに伴ったルールなどをつくること、そして支援学校の人と交流会を開き、一緒に遊んで楽しかったかどうかアンケート調査を行うことにしました。

簡単で、なおかつ彼らと私達で差が生まれえないようなルールを設定し、私は「輪拾い」

と「キャップ in ゲーム」という 2 つのゲームを提案しました。

1 2 月、先生方のはからいで支援学校の皆さんと再び交流会を開くことができました。
私は始めに、2 つのゲームのルールを発表しました。

そして、いよいよレクリエーションが始まりました。私は少し緊張しながらも、みんなと一緒に楽しみました。そして、小学生のときは遊んでくれなかった支援学校の皆さんが、私の考えた 2 つのゲームで笑いながら一緒に遊んでくれたのです。本当に努力のかいがあったなと思うと同時に、一緒に遊べたことを嬉しく思いました。それが課題に対する答えの全てとは思いませんが、あの日の支援学校の皆さんの笑顔が私の心に鮮明に蘇ってくるのです。

後日、アンケートで楽しめたかどうかを質問した結果、支援学級の生徒の皆さんは、みんな楽しかったと思ってくれていたことが分かりました。

そして、障害のある人と一緒に楽しく遊ぶためには、相手のことを考え、運動や思考が苦手な人でもできる遊びやルールの工夫が必要だという結論に至りました。

この経験から、私は障害のある人と私達が分かり合い、助け合えることを知りました。
障害のある人と私達が全てのことを同じようにはできなくても、共に楽しんだり、喜んだり、笑いあえたりできるのです。障害者差別とは、黒い所にぽつんと白い点があるようなものではないでしょうか。障害のある人はまわりと違う白色なので目立ってしまう。でも変わるべきはまわりの黒色なのです。違う個性への偏見をなくし、分かり合える環境が必要なのだと思います。「大丈夫、君はここにいていいんだよ」と手を差し伸べてあげることが必要なのです。例えば、スロープや点字ブロックのようなものが増えていくことで、だんだんとまわりの色が、黒から白へと近づいていくのでしょうか。そうすれば、障害のある人はまわりと溶け込み、自然に差別もなくなり、みんなが幸せになれるのだと思います。私は障害のある人も、ない人も、それぞれが違う個性をもった、大切な仲間だと思っています。